The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古ノルド語 -sk動詞について : エッダ神話詩での実例分析
Author(s)	堀井, 祐介
Citation	IDUN. 2001, 14, p. 169-201
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95689
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古ノルド語 -sk 動詞について
―エッダ神話詩での実例分析―

堀井 祐介

1．序

ゲルマン語の一つである古ノルド語の動詞には語尾に-sk をとるものがある（以下 -sk 動詞と呼ぶ）．本論では以下に挙げる文法書における-sk 動詞についての記述をまとめ，エッダ神話 [1] における実例を分析する．

（ ）内は本論で引用する際の略語および当該ページを示す．

- Nygaard, M. 1865-1867. *Eddasprogets Syntax I-II.* Bergen: Ed. B. Giertsen. (Nygaard ES, 49-57)
- Nygaard, M. 1906. *Norrøn Syntax.* Oslo: Aschehoug. Reprinted 1966. (Nygaard NS, 154-174)
- Hansen, Eskil, Else Mundal & Kåre Skadberg. 1975. *Norrøn grammatikk.* Oslo: Universitetsforlaget. (Hansen *et al.*, 109-110, 153-154)
- Iversen, Ragnvald. 1984. *Norrøn grammatikk.* 7. utgave revidert ved E. F. Halvorsen. Oslo: Aschehoug. (Iversen/ Halvorsen, 120-121, 149- 150)

2．-sk 動詞の形態について

まずはじめに，-sk 動詞の形態について各文法書の記述をまとめてみる．

Nygaard ES (pp. 49-52)：

形態としては，再帰代名詞を動詞に付けることにより特徴づけられる．しかし，古代の言語においては，この表現から徐々に特徴的な動詞表現が発展していった．この中動態つまり再帰形はまさに，再帰代名詞を接尾辞として付けるラテン語の受動と同じである．古ノルド語ではラテン語と同じように３人称単・複の再帰代名詞 sik をつける．これには，能動形と同じように，３人称だけでなく，２人称も，後になって１人称も同じである．しかし，「エッダ詩集」では１人称の不定

詞形は単・複ともに mk をつける(mik が再帰代名詞として用いられる).

Nygaard NS (pp. 154-155)：

動詞の再帰形は(後置定冠詞と同様に),ノルド祖語から古ノルド語が形作られる際に出現したもので,ノルド祖語や他のゲルマン語には無い,古ノルド語特有のものである.語尾の -sk (-zk, -zt, -z, -st) は sik から生じたと考えられている.それと同様に,あらゆる状況を考慮すると,語尾の –mk は mik から生じており, -msk, -mzk, -mzt, -mz, -mst は -sk, -zk, -zt, -z, -st 形の影響を受けて作られたと考えられる.

Hansen *et al.* (pp. 109-110)：

ゲルマン語における古い中動態(本質的に受動の意味)は,heita の現在形にその名残りをとどめるのみである.一方で,代名詞 mik (mér), sik (sér) と動詞の能動形とが接辞的に結びついた新しい中動態が発達した.mik の短縮形 –mk や mér の短縮形 -m が 1 人称に結合され,sik の短縮形 –sk や sér の短縮形 -s が他の人称の全ての動詞形に結合されている(-mk, -sk が一番一般的である).

Iversen/ Halvorsen (pp. 120-121)：

動詞のこの形態はノルド語に特有のものである.これは能動形に人称代名詞が前接的に結合することにより出来たものである.-mk < mik, -m < *mR < *meR (最初は与格支配の動詞), -sk < sik, -s < *sR < *seR. これらの語尾のうち -mk, -sk が最も一般的である.その起源に対応して -mk が動詞の 1 人称単数形に対してのみ用いられ, -sk はその区別なく,動詞のその他の人称形に対して用いられるように分かれている(-sk は 1 人称単数に対しても用いられ –mk を駆逐する).そればかりでなく,様々な方法で語尾屈折において類推が働いた.こういう風にして発生したこの新しい動詞の形態は,一部には再帰,一部には相互,一部には中動,一部には受動の用法を持つようになった.受動は特に学術的文体に用いられた.

以上, -sk 動詞の形態についてノルウェーの新旧文法書を見てきたが,記述の仕方に差はあるものの,-sk 動詞は動詞の能動形に再帰代名詞の短縮形を前接的に付けて作られたという点では意見の一致を見ているように思われる.また,この形態的な成り立ち故に -sk 動詞は

本来は再帰の意味を表現するのに用いられていたという記述もいくつか見られた．

3．-sk 動詞の用法について

次に-sk 動詞の用法についての各文法書の記述をまとめてみる．

Nygaard ES (pp. 52-57)：

再帰

どういう動詞の動作が主語に帰ってくる（再帰）のかに応じて，中動態のなかのいろいろな例を区別することが出来る．

a) 再帰代名詞（または再帰的に用いられている人称代名詞）の対格を伴う中動態．それらの代名詞は，動詞の目的語か，後に続く不定詞の主語として理解される．中動態の対格目的語に，並置として，または述部として付け加えられる修飾語は，主語になり，主格で表される．

b) 再帰代名詞の与格を伴う中動態．与格は，動詞に，通常の関与，好意的か敵対的かの心情，具格的意味を付け加えるものである．

c) 再帰代名詞の対格または与格を伴う中動態．前置詞を伴う．

相互

中動態，再帰の意味から相互の意味が出てくる．相互とは，複数主語が互いに影響を及ぼし合ったり,関わりを持ったりすることを表す．中動態でしか用いられない動詞もある．再帰形ではあるが，再帰の意味が一見まったく無いように思われる動詞に再帰代名詞がつくことによって，新しい能動の意味が出ている．再帰形のいくつかは，対格目的語をとる．しかし，大半は与格目的語である．それは，与格が動詞の表す動作の対象を表す場合と，関与を表す場合と両方があるからである．

能動

最後のものとして，再帰形で能動の意味を表すものがある．再帰形だけで行為の主語を強調する働きがある．元の動詞から意味の変わっているものもある．

受動

再帰形で受動を表す場合もある．ラテン語の受動が本来再帰から発展したのと同様に，比較的新しいスウェーデン語とデンマーク語の受動もまた，再帰形から発展したものである．(ノルウェー語はその反対に本来の意味を保っている．) しかしながら，一般的に「エッダ詩集」に関

しては，再帰形は受動の意味では用いられていない．中動態が受動で訳されている場合は，ほとんど別の説明がされている．受動の意味がある場合もある．それらは，表現を正確に理解していないか，または，後の時代の用法への示唆である．

Nygaard NS (pp. 156-174)：

しばしば本来の再帰の意味は多少ともあいまいになり，そのため変更された，もしくは新しい動詞の意味を取るようになった．

韻文においては，口語を基底とした文体と同様に再帰形が全体として多く用いられる．一部，より本来的なものの痕跡が残っている（特に -umk の形で）とはいうものの，一方で，学術的文体では特殊な類推が働いている．ここでは，再帰形動詞の形は，ラテン語の膠着受動態を反映させるのに用いられている．再帰の意味は，部分的に，受動の意味と非常に近いので，簡単に移行しうる．したがって，口語を基底とする文体において，言語の自然な発展と思われる再帰形の受動の用法が存在している．しかし，この用法はそんなに頻繁にあるわけではなく，類推が全体に浸透したというわけではない．学術的文体において再帰形が（口語を基底とした文体においては vera, verða を伴って表される受動態か，または，不定主語とそれに続く補語を伴う能動形の動詞で表されているような）あらゆる種類の受動の関係を表しているのは，外からの影響である．

<u>明確な再帰の意味</u>

再帰形は，再帰代名詞（または 1，2 人称の人称代名詞が再帰の意味のとき）が対格で目的語として動詞に付加されたときに用いられる．

<u>相互の意味</u>

再帰形は相互の意味にも用いられる．複数の主語が互いに影響を及ぼしたり，その行為において互いにある種の配慮をしたり，互いにある種の関係に立つことを表す．このようにして，この形は大抵，再帰の意味と同じように用いられるが，ただし，しばしば与格関係を内包したり，前置詞支配を伴う点で違いがある．

<u>あいまいな再帰の意味</u>（能動）

能動形で「ある状態にする，ある状態をもたらす」という意味を表す多くの動詞は，再帰形で「ある状態になる／移る／ある」を表す．

a) 形容詞から派生している動詞で，性質や状態を表す動詞．

b) 感情，気持ち，気分などの心的態度を表す動詞．

c) 始まり，終わり，停止を表す動詞．

d) 破壊，堕落，腐敗，強化，改善を表す動詞．

e) 始動，動き出させることを表す動詞．

再帰形で実際には能動形と同じ意味を表す動詞がいくつかある．何か特別に，再帰形から出てきたとは考えられないが，特別な意味を表す動詞もある．

受動の意味

時々，再帰形があまり厳密ではない表現において，受動態の代わりに用いられることがある．

- 「気づく，理解する，把握する，経験する，評価する」などの意味を表す動詞は再帰形においてしばしば，受動にきわめて近い意味を表す．しかし，それは受動とは完全に考えられていない．なぜなら動作主が前置詞 af ではなく，関与の与格で表されるからである．
- これらの動詞やそれに似た意味を持つ他の動詞の再帰形 3 人称単数は主語のない受動表現として特に用いられる．「思われる」,「考えられる」などを表す動詞においても同様である．
- 純然たる受動の意味では，一般に口語を基底とした文体ではわずかの動詞しか用いられない．
- 一方で，学術的文体において，ラテン語を規範にして，再帰形は広範囲に，明確な受動の意味で用いられる．そこでは，主語が影響にさらされることを表し，そのため，論理的主語は前置詞 af によって付け加えられている．
- 一部は学術的文体の影響から，また一部は上述の用法の類推から，再帰形を受動の意味に用いる例が，時々口語を基底とした文体においても見られる．

Hansen *et al.* (pp. 153-154)：

再帰用法

主語が主語自身に向けた行為を表す．

a) 再帰の語尾が対格の再帰の直接目的語に代わる場合．再帰の語尾が後に続く不定詞の論理的主語である再帰の目的語に代わる場合．

b) 再帰の語尾が与格の再帰の直接目的語に代わる場合．

c) 再帰の語尾が間接目的語に代わる場合．

d) 再帰の語尾が前置詞に支配された再帰代名詞に代わる場合．(まれ)

相互用法

複数主語が互いに作用してあっていることを表す．再帰の語尾は上述の再帰用法と同様に４つのタイプ (a, b, c, d)で再帰代名詞に代わることが出来る．

起動用法（能動）

主語が新しい状態に入ることを表す．再帰形しかない動詞も一部ある．多くの場合，現代ノルウェー語に訳す際に受動にする．しかし，表現としては受動ではないことは，形の上で人を与格の間接目的語で表すことからわかる．行為者は af を伴う前置詞句で表さない．

受動用法

口語を基底とする文体において，ごく一部の動詞にしか受動用法が見られない．しかしながら，この受動の用法は，少し特徴的である．文法上の主語が影響を受ける行為を実行する動作主と考えるのは，たいていの場合困難であろう．また，これらの動詞について最も重要なことは，多くの場合，起動を強調している点である．

一方で，学術的文体において再帰形はラテン語の屈折受動の例にならって，純然たる受動の意味で用いられることがよくある．つまり，文法的主語が動作の影響を受けていることを示している．動作を引き起こす者（動作主）はしばしば af を伴った前置詞句で表される．

Iversen/ Halvorsen (pp. 149-150)

-sk 動詞には以下のような機能がある．

再帰

再帰代名詞がそれぞれ，対格目的語，与格目的語，前置詞の支配を受けている目的語として，また不定詞を伴った対格構文の主語として用いられている場合．

相互

再帰代名詞がそれぞれ，対格目的語，与格目的語，前置詞の支配を受けている目的語として用いられている場合．

受動

純然たる受動の機能は，通例口語を基底とする文体において次のような動詞のみである．「気づく，理解する，評価する」などの意味を表す再帰動詞は受動態にかなり近い．その表現方法は，行為者が前置詞 af を伴った副詞句ではなく，与格目的語で表される点が，受動とは異なる．

注：一連の動詞は再帰の本来の機能から離れ，状態の変化を表すのに用いられるようになった.形容詞から派生した動詞,感情を表す動詞，多くの移動を表す動詞などである.

能動

能動の意味を表す-sk 動詞には,おそらく類似の意味を持つ再帰動詞からの類推で作られたものもある.

注：-sk 形しかない動詞もある.

以上の記述から，-sk 動詞には以下の４つの用法があると考えられる.

- 再帰
  - ✧ -sk 動詞の本来の用法
  - ✧ 主語がその動作の目的語である場合
  - ✧ 動作主自身に帰する（動作主に関与する）行為である場合
- 相互
  - ✧ 主語が複数の場合
  - ✧ 複数主語が互いに関与・作用している場合
- 能動
  - ✧ 能動形で「ある状態にする，ある状態をもたらす」という意味を表す動詞が-sk 形になった場合
  - ✧ 起動（主語が新しい状態に入る）
- 受動
  - ✧ 「気づく，理解する，経験する，見積もる，議論する」などの意味を表す一部の動詞
  - ✧ 行為者を af で表す純粋な受動とは異なる
  - ✧ 学術的文体で用いられる場合がある

４．エッダ神話詩における -sk 動詞の実例

それでは， -sk 動詞は実際にどのように用いられているのかについて，エッダ神話詩での実例を紹介していく．エッダ神話詩での動詞データ総数 4133 例．そのうち-sk 動詞は 105 例であった[2)]．その内訳は再帰 76 例,相互 24 例,能動 5 例であった.以下にエッダ神話詩での –sk 動詞の分析例をいくつか示してみる.動詞データを-sk 動詞,その意味，用いられている場所，主語，補語，目的語，用いられている文脈の順にあげ，その後に例の説明，判断基準を述べる．なお，動詞データ中の場所の略称は以下の通りである.

ALV(=Alvíssmál), GRM(=Grímnismál), GRT(=Grottasöngr), HAV(=Hávamál), HDL(=Hyndluljóð), HRBL(=Hárbarðsljóð), HYM(=Hymiskviða), LS(=Lokasenna), RT(=Rígsþúla), SKM(=Skírnismál), TRK(=Þrymskviða), VM (=Vafþrúðnismál), VSP(=Völuspá)

＊作品名の後に韻文部分には節番号，行番号，散文部分には出現順を示すために便宜上割り当てたアルファベットが付けてある．

エッダ神話詩での全ての –sk 動詞データを末尾に参考資料として挙げることとする．

再帰

エッダ神話詩中の –sk 動詞を，上でも述べたように「主語がその動作の目的語である場合」,「動作主自身に帰する（動作主に関与する）行為である場合」を判断基準として分類すると，76 例が再帰用法であると考えられる．なお，一部再帰形しか持たない動詞も再帰用法として分類した．

leggjask　　意味 横たわる　　場所 RT　19.3
主語 hann　　（ヘイムダッル　　）
補語 x　　（x　　）
目的語　　x （x　　）
Text-2　reis frá borði,
Text-1　réð at sofna;
Text　meirr *lagðiz hann
Text1　miðrar rekkiu,
Text2　en á hlið hvára

この leggjask は，神ヘイムダッルがリーグと名乗って旅をし，立ち寄った先で王侯，自由農民，奴隷の祖先が誕生する話の中で用いられており,「リーグが（夫婦の間の）ベッドの真ん中に横たわった」とある．leggja は他動詞として「横たえる」を意味する．この文脈での leggjask は「自らを横たえる」すなわち「横たわる」であり，<u>動作主自身を目的語とし，動作主自身に帰する行為</u>であると考えられる．

nefnask　　意味 名乗る　　場所 GRM　A
主語 Sá　　（オージン　　）
補語 Grímnir　　（グリームニル（＝オージン））
目的語　　x （x　　）
Text-2　inn mesti hégómi at Geirröðr væri eigi matgóðr. Ok þó
Text-1　lætr hann handtaka þann mann er eigi vildo hundar á
Text　ráða. Sá var í feldi blám ok *nefndiz Grímnir, ok sagði
Text1　ekki fleira frá sér, þótt hann væri at spurðr. Konungr lét
Text2　hann pína til sagna ok setia milli elda tveggia, ok sat hann

自らの贔屓する王ゲイルロズの悪い噂を聞いたオージンが，その噂の真偽を確かめるために姿を変えてゲイルロズを訪ねていく.その時に，

自らをグリームニルと「名乗る」. nefna は他動詞として「名前を付ける，呼ぶ」を意味する． ここでの nefnask は「自らを名付ける」すなわち「名乗る」であり，動作主自身を目的語とし，動作主自身に帰する行為であると考えられる．

相互

「主語が複数形であり，かつそれらの主語が互いに関与・作用している場合」を相互と考えると，エッダ神話詩中では 24 例の –sk 動詞が相互用法であると考えられる．

berjask　　意味 戦う　　場所 VSP　45.1
主語 Brœðr　　(兄弟たち　　)
補語 x　　(x　　)
目的語　　x (x　　)
Text-2　röm sigt=í=va.
Text-1
Text　Brœðr muno *beriaz
Text1　ok at bönom verða<z>,
Text2　muno systrungar

この berjask は，「巫女の予言」の中で，世界滅亡の直前に世の中が混乱している様子を描いている部分で用いられている．berja は他動詞として「殴る」という意味があり，それが-sk 動詞となって「兄弟（複数形）がお互いに殴り合う」すなわち「戦う」という意味で用いられていると考えられる．

finnask　　意味 会う　　場所 HRBL　59.4
主語 vit　　(ソール，オージン　　)
補語 x　　(x　　)
目的語　　x (x　　)
Text-2　allz þú mér skœtingo einni svarar;
Text-1　launa mun ek þér farsynion,
Text　ef vit *finnomk í sinn annat!
Text1
Text2　{Hárbarðr kvað:}>

この finnask は，ハールバルズルという渡し守に姿を変えた，北欧神話の主神であるオージンが，対岸へ渡してくれるように頼んだ，一番力強い神であるソールをさんざんからかい，結局その頼みを聞き入れなかった．それに対してソールが捨てぜりふとして「もし再び会うことになったら，船に乗せて対岸へ渡さなかったことを後悔させてやる」と述べている中で用いられている．finna は他動詞として「見つける」を意味し，ここでは「我々２人（ソールとオージン）がお互いに見つける」すなわち「会う」ことを意味している．

能動

「ある状態にする，ある状態をもたらす」という意味を表す動詞が-sk形になった場合で判断すると，エッダ神話詩中では5例が能動用法に分類される．

frævask　意味 豊かになる　場所 HAV 141.1
主語 ek　(オージン　)
補語 x　(x　)
目的語　x (x　)
Text-2　ausinn Óðreri.
Text-1
Text　Þá nam ek *frævaz
Text1　ok fróðr vera
Text2　ok vaxa ok vel hafaz;

この frævask はオージンが知恵の蜜酒を飲んだ後で，「豊かになる」という場面で用いられている．fræva は能動で「豊かにする」を意味し，-sk 形になることで「豊かな状態になる」という意味になっている．

受動

-sk 動詞が受動用法で用いられる例はごく一部の限られた動詞に対してであり，Nygaard ES でも述べられていたようにエッダ神話詩中には受動用法で用いられている –sk 動詞は見られなかった．

5．おわりに

以上，非常に簡単ではあるが，古ノルド語における-sk 動詞について形態と用法の2点について，はじめに古ノルド語を扱った4冊の文法書の記述をまとめた．形態的には動詞の能動形に再帰代名詞の短縮形が接辞として付けられたものであり，用法としては再帰，相互，能動，受動の4つに分類できると考えられる．

次に，エッダ神話詩で用いられている 105 例の-sk 動詞について，この4つの用法のどれに該当するのかを分類した．

文法書の記述をまとめることはすでに長年行われてきた有効な研究方法である．今回はそれに加えて，まとめた内容を包括的なデータベースに基づく実例で検証した．コンピュータデータベースを利用するこのようなコーパス言語学的研究は，英語などでの大規模なデータベースを利用した辞書作成などでその有効性が確認されているが，古ノルド語のような現在使われていない，またデータ規模としては小さい言語に対する研究ではさらに有効であると考えられる．今後も古ノルド語データベースを充実させ研究を進めていきたい．

注

(1) エッダ神話詩とは，「エッダ詩集」の中で特に神々を題材としたものを指す．「エッダ詩集」は大きく分けてこの神話詩ともう一つ英雄を題材とした英雄詩とに分けられる．「エッダ詩集」とは特定の作者によって書かれた一つの作品の名前ではなく，古西ノルド語によって書かれた類似の形式，内容をもつ韻文作品に対して用いられる総称である．この「エッダ」という名前は，中世アイスランドを代表する文人のスノッリ・ストゥルルソンが 1220 年頃に書いた古西ノルド語韻文入門書『エッダ』写本から来ている．

(2) 今回分析に利用した動詞データベースは，北欧神話文献資料における動詞の用法分析の目的で作成したものであり，「エッダ詩集」，スノッリ・ストゥルルソンの『ギュルヴィの惑わし』，『ユングリンガ・サガ』を対象としている．動詞のデータ総数は 15426 例である．以下に挙げる刊本を使用した．

Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte I. Völuspá, Hávamál.* København. Ejnar Munksgaard.

Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte II. Gudedigte.* København. Ejnar Munksgaard.

Helgason, Jón (udg.). 1971. *Eddadigte III. Heltedigte første del.* København. Ejnar Munksgaard.

Holtsmark, Anne & Jón Helgason (udg.). 1976. *Snorri Sturluson EDDA. Gylafaginning og prosafortellingene av Skáldskaparmál.* København. Ejnar Munksgaard.

Wessén, Elias (udg.). 1952. *Snorri Sturluson YNGLINGASAGA.* København. Ejnar Munksgaard.

参考資料

再帰76例

öðlask 意味 得る 場所 RT 45.5
主語 x (コン)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 brögðum beitti
Text-1 ok betr kunni;
Text þá *öðlaðiz
Text1 ok þá eiga gat
Text2 Rígr at heita,

öðlask 意味 得る 場所 TRK 29.7
主語 þú (フレイヤ)
補語 x (x)
目的語 ástir mínar (スリュムの姉の好意)
Text-2 (Láttu þér af höndom
Text-1 hringa rauða,
Text ef þú *öðlaz vill
Text1 ástir mínar,
Text2 ástir mínar,

þreifask 意味 探す 場所 TRK 1.8
主語 Iarðar burr (ソール)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 skör nam at dýia,
Text-1 réð Iarðar burr
Text um at *þreifaz.
Text1
Text2 Ok hann þat orða

þykkjask 意味 思う 場所 HAV 26.2
主語 Ósnotr maðr (愚か者)
補語 x (x)
目的語 x (節)
Text-2
Text-1 Ósnotr maðr
Text *þikkiz alt vita,
Text1 ef hann á sér í vá vero;
Text2 hitki hann veit,

þykkjask 意味 思う 場所 HAV 28.1
主語 sá (人)
補語 Fróðr (賢い)
目的語 x (x)
Text-2 þótt hann mæli til mart.
Text-1
Text Fróðr sá *þykkiz
Text1 er fregna kann
Text2 ok segia it sama;

þykkjask		意味	思う	場所	HAV	30.4
主語	margr	(	多くの人	)		
補語	fróðr	(	賢い	)		
目的語	x	(	x	)		

Text-2 skala maðr annan hafa,
Text-1 þótt til kynnis komi;
Text margr þá fróðr *þikkiz,
Text1 ef hann freginn erat
Text2 ok nái hann þurrfiallr þruma.

þykkjask		意味	思う	場所	HAV	47.4
主語	x	(	オージン	)		
補語	auðigr	(	幸せな	)		
目的語	x	(	x	)		

Text-2 fór ek einn saman;
Text-1 þá varð ek villr vega;
Text auðigr *þóttumz
Text1 er ek annan fann;
Text2 maðr er mannz gaman.

þykkjask		意味	思われる	場所	HAV	49.4
主語	rekkar	(	木の人形	)		
補語	er	(	節	)		
目的語	þat	(	x	)		

Text-2 gaf ek velli at
Text-1 tveim trémönnom:
Text rekkar þat *þóttuz
Text1 er þeir rift höfðo;
Text2 neiss er nökkviðr halr.

þykkjask		意味	思われる	場所	HAV	99.2
主語	x	(	オージン	)		
補語	unna	(	愛する	)		
目的語	x	(	x	)		

Text-2
Text-1 Aptr ek hvarf
Text ok unna *þóttomz
Text1 vísom vilia frá;
Text2 hitt ek hugða

þyljask		意味	ブツブツつぶやく	場所	HAV	17.3
主語	hann	(	愚か者	)		
補語	x	(	x	)		
目的語	x	(	x	)		

Text-2 Kópir afglapi,
Text-1 er til kynnis kömr,
Text *þylsk hann um eða þrumir;
Text1 alt er senn,
Text2 ef hann sylg um getr,

alask 意味 食べる 場所 GRM 18.6
主語 einheriar (エインヘリャル)
補語 x (x)
目的語 hvat (何を)
Text-2 fleska bezt;
Text-1 en þat fáir vito,
Text <við> hvat einheriar *alaz.
Text1
Text2 Gera ok Freka

alask 意味 生まれる 場所 HDL 18.3
主語 œztir kappar (素晴らしい戦士たち)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Dagr átti Þóru
Text-1 drengiamóður;
Text *óluz í ætt þar
Text1 œztir kappar:
Text2 Fraðmarr ok Gyrðr

alask 意味 生まれる 場所 VM 45.6
主語 aldir (人類)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 morgindöggvar
Text-1 þau sér at mat hafa;
Text þaðan af aldir *alaz.
Text1
Text2 {Óðinn} kvað:

alask 意味 生まれる 場所 VM 49.6
主語 þær (ノルンたち)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 hamingior einar
Text-1 þeira í heimi ero,
Text þó þær með iötnom *alaz.
Text1
Text2 Óðinn kvað:

berask 意味 注がれる 場所 LS A
主語 öl (ビール)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Freyr, Byggvir ok Beyla. Mart var þar ása ok álfa. Ægir
Text-1 átti tvá þiónustomenn, Fimafengr ok Elder. Þar var
Text lýsigull haft fyrir eldzliós; siálft *barsk þar öl; þar var
Text1 griðastaðr mikill. Menn lofoðo miök hverso góðir þiónustomenn
Text2 Ægis vóro. Loki mátti eigi heyra þat, ok drap hann

bifask 意味 震える 場所 SKM 14.4
主語 iörð (大地)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 er ek heyri nú til
Text-1 ossom rönnom í?
Text iörð *bifaz,
Text1 en allir fyrir
Text2 skiálfa garðar Gymis.

bifask 意味 震える 場所 TRK 13.4
主語 allr ása salr (アースの館)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 ok fnása=ð=i,
Text-1 allr ása salr
Text undir *bifðiz,
Text1 stökk þat it mikla
Text2 men Brísinga:

bindask 意味 着る 場所 TRK 17.5
主語 ek (ソール)
補語 x (x)
目的語 brúðar líni (花嫁衣装)
Text-2 (Mik muno æsir
Text-1 argan kalla,
Text ef ek *bindaz læt
Text1 brúðar líni!)
Text2

eflask 意味 同盟する 場所 HDL 15.1
主語 hann (ハールヴダン)
補語 x (x)
目的語 Eymund, œztan manna (エイムンド)
Text-2 með himins skautum.
Text-1
Text *Efldiz hann við Eymund,
Text1 œztan manna,
Text2 en hann <vá> Sigtrygg

eignask 意味 得る 場所 HAV 79.2
主語 Ósnotr maðr (愚か者)
補語 x (x)
目的語 fé, flióðs munoð (富，女性の愛)
Text-2
Text-1 Ósnotr maðr,
Text ef *eignaz getr
Text1 fé eða flióðs munoð,
Text2 metnaðr hánom þróaz,

eignask 意味 得る 場所 RT 36.7
主語 hann (ヤルル)
補語 x (x)
目的語 óðalvöllu, aldnar byggðir (先祖伝来の土地，古い土地)
Text-2 sitt gaf heiti,
Text-1 son kveðz eiga;
Text þann bað hann *eignaz
Text1 óðalvöllu,
Text2 óðalvöllu,

fœrask 意味 身につける 場所 HYM 31.3
主語 hafra dróttinn (ソール)
補語 x (x)
目的語 allra ásmegin (アースの力)
Text-2 Harðr reis á kné
Text-1 hafra dróttinn,
Text *fœrðiz allra
Text1 í ásmegin;
Text2 heill var karli

fallask 意味 忘れる 場所 TRK 10.6
主語 x (x)
補語 x (x)
目的語 sögur (話し)
Text-2 löng tíðindi!
Text-1 Opt sitianda
Text sögur um *fallaz,
Text1 ok liggiandi
Text2 lygi um bellir.)

finnask 意味 ある 場所 VSP 3.5
主語 iörð, upphiminn (大地，天)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 vara sandr né sær
Text-1 né svalar unnir,
Text iörð *fannz æva
Text1 né upphiminn,
Text2 gap var ginnunga,

finnask 意味 見つけられる 場所 VSP 61.4
主語 gullnar töflor (黄金の駒)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 undrsamligar
Text-1 gullnar töflor
Text í grasi *finnaz,
Text1 þærs í árdaga
Text2 áttar höfðo.

firrask 意味 避ける 場所 LS 25.6
主語 firar (人々)
補語 x (x)
目的語 forn rök (古代の出来事)
Text-2 hvat it æsir tveir
Text-1 drýgðuð í árdaga;
Text *firriz æ forn rök firar.
Text1
Text2 {Loki kvað:}>

gangask 意味 破られる 場所 VSP 26.5
主語 eiðar, orð, sœri, mál öll (誓い, 言葉, 誓い,約束)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 -- hann sialdan sitr
Text-1 er hann slíkt um fregn! --;
Text á *gengoz eiðar,
Text1 orð ok sœri,
Text2 mál öll meginlig,

gerask 意味 来る 場所 HRBL 40.2
主語 er (軍隊)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 {Hárbarðr kvað:}>
Text-1 Ek vark í hernom,
Text er hingat *görðiz
Text1 gnæfa gunnfana,
Text2 geir at rióða.

hafask 意味 栄える 場所 HAV 141.3
主語 ek (オージン)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Þá nam ek frævaz
Text-1 ok fróðr vera
Text ok vaxa ok vel *hafaz;
Text1 orð mér af orði
Text2 orz leitaði,

hafask 意味 持つ 場所 VSP 50.2
主語 Hrymr (フリュム)
補語 x (x)
目的語 lind (楯)
Text-2
Text-1 Hrymr ekr austan,
Text *hefiz lind fyrir;
Text1 snýz iörmungandr
Text2 í iötunmóði;

hvílask 意味 休む 場所 GRT 17.1
主語 hendr (手)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 daprt er at Fróða!
Text-1
Text Hendr skulo *hvílaz,
Text1 hallr standa mun,
Text2 malit hefi ek firir mik

hyggjask 意味 思う 場所 HAV 16.2
主語 Ósniallr maðr (臆病者)
補語 x (x)
目的語 x (節)
Text-2
Text-1 Ósniallr maðr
Text *hyggz muno ey lifa,
Text1 ef hann við víg varaz;
Text2 en elli gefr

hyggjask 意味 思う 場所 LS 15.6
主語 x (ブラギ)
補語 hvatr (勇敢な)
目的語 x (x)
Text-2 vega þú gakk,
Text-1 ef þú <v>reiðr sér,
Text *hyggz vætr hvatr fyrir.
Text1
Text2 {Iðunn} kvað:

kaupask 意味 変える 場所 HAV 107.1
主語 x (外見)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 svá hætta ek höfði til.
Text-1
Text Vel *keyptz litar
Text1 hefi ek vel notit,
Text2 fás er fróðom vant;

kippask 意味 動く 場所 LS G
主語 hann (ロキ)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 draup þar ór eitr. Sigyn kona Loka sat þar ok helt
Text-1 munnlaug undir eitrit. En er munnlaugin var full, bar
Text hón út eitrit; en meðan draup eitrit á Loka. Þá *kiptiz
Text1 hann svá hart við, at þaðan af skalf iörð öll; þat ero nú
Text2 kallaðir landskiá<l>ptar.

komask 意味 出て来る 場所 HDL 48.3
主語 þú (ヒュンドラ)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 (Ek slæ eldi
Text-1 of íviðiu,
Text svá at þú ei *kemz
Text1 á burt heðan.)
Text2

komask 意味 いる 場所 HRBL 33.2
主語 ek (ソール)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Þórr {kvað:}>
Text-1 Ek mynda þér þá þat veita
Text ef ek viðr of *kœmiz.
Text1
Text2 Hárbarðr kvað:

kveðask 意味 言う 場所 RT 36.6
主語 x (ヘイムダッル)
補語 x (x)
目的語 eiga+ (節)
Text-2 rúnar kendi;
Text-1 sitt gaf heiti,
Text son *kveðz eiga;
Text1 þann bað hann eignaz
Text2 óðalvöllu,

kveikjask 意味 燃える 場所 HAV 57.3
主語 funi (炎)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Brandr af brandi
Text-1 brenn unz brunninn er,
Text funi *kveykiz af funa;
Text1 maðr af manni
Text2 verðr at máli kuðr,

látask 意味 叫ぶ 場所 GRM 17.4
主語 mögr (ヴィーザル)
補語 x (x)
目的語 =at=+ (節)
Text-2 ok há grasi
Text-1 Víðars land viði;
Text en þar mögr of *læzk
Text1 af mars baki
Text2 frœkn =at= hefna föður.

látask	意味	行う	場所	HDL	29.5
主語	Váli	(	ヴァーリ	)	
補語	verðr	(	価値がある	)	
目的語	at+	(	節	)	

Text-2 Baldr er hné
Text-1 við banaþúfu;
Text þess *létz Váli
Text1 verðr at hefna,
Text2 síns bróður

látask	意味	行う	場所	LS	52.3
主語	þú	(	スカジ	)	
補語	boðit	(	招待する	)	
目的語	mér	(	ロキ	)	

Text-2 Léttari í málom
Text-1 vartu við Laufeyiar son,
Text þá er þú *létz mér á beð þinn boðit;
Text1 getit verðr oss slíks,
Text2 ef vér görva skolom

leggjask	意味	横たわる	場所	RT	19.3
主語	hann	(	ヘイムダッル	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	

Text-2 reis frá borði,
Text-1 réð at sofna;
Text meirr *lagðiz hann
Text1 miðrar rekkiu,
Text2 en á hlið hvára

leggjask	意味	横たわる	場所	RT	5.3
主語	hann	(	ヘイムダッル	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	

Text-2 Rígr kunni þeim
Text-1 ráð at segia;
Text meirr *lagðiz hann
Text1 miðrar rekkiu,
Text2 en á hlið hvára

leiðask	意味	嫌う	場所	HAV	130.10
主語	mange	(	誰もない	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	gott	(	良い事	)	

Text-2 fögro skaldu heita
Text-1 ok láta fast vera;
Text *leiðiz mange gott, ef getr.
Text1
Text2 Ráðomk þér, Loddfáfnir,

letjask 意味 止める 場所 LS 47.3
主語 -ðu (ロキ)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Ölr ertu, Loki,
Text-1 svá at þú er<t> örviti,
Text hví ne *lezkaðu, Loki?
Text1 þvíat ofdrykkia
Text2 veldr alda hveim,

leynask 意味 隠れる 場所 VM 45.2
主語 þau (リーヴ, リーヴスラシル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 {Vafþrúðnir} kvað:
Text-1 Líf ok Lífþrasir,
Text en þau *leynaz muno
Text1 í holti Hoddmímis;
Text2 morgindöggvar

mælask 意味 話す 場所 VM 9.2
主語 þú (オージン)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 {Vafþrúðnir kvað:}>
Text-1 Hví þú þá, Gagnráðr,
Text *mæliz af gólfi fyrir?
Text1 farðu í sess í sal!
Text2 þá skal freista,

minnask 意味 思い出す 場所 VSP 60.5
主語 æsir (アース神たち)
補語 x (x)
目的語 megindóma, Fimbultýs fornar rúnar (大いなる出来事, オージンの古い魔術)
Text-2 ok um moldþinur
Text-1 mátkan dœma
Text <ok> *<minnaz> <þar>
Text1 <á> <megindóma>
Text2 ok á Fimbultýs

nálgask 意味 近づく 場所 GRM 53.6
主語 þú (ゲイルロズ)
補語 x (x)
目的語 mik (オージン)
Text-2 =úf=ar ro dísir,
Text-1 nú knáttu Óðin siá,
Text *nálgaztu mik ef þú megir!
Text1
Text2 Óðinn ek nú heiti,

nýsask 意味 様子を窺う 場所 HAV 7.6
主語 fróðra hverr (賢い人)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 eyrom hlýðir,
Text-1 en augom skoðar;
Text svá *nýsiz fróðra hverr fyrir.
Text1
Text2 Hinn er sæll

nefnask 意味 名乗る 場所 GRM A
主語 Sá (オージン)
補語 Grímnir (グリームニル（オージン）)
目的語 x (x)
Text-2 inn mesti hégómi at Geirröðr væri eigi matgóðr. Ok þó
Text-1 lætr hann handtaka þann mann er eigi vildo hundar á
Text ráða. Sá var í feldi blám ok *nefndiz Grímnir, ok sagði
Text1 ekki fleira frá sér, þótt hann væri at spurðr. Konungr lét
Text2 hann pína til sagna ok setia milli elda tveggia, ok sat hann

nefnask 意味 名乗る 場所 RT 10.6
主語 gengilbeina (女性)
補語 Þír (シール)
目的語 x (x)
Text-2 armr sólbrunninn,
Text-1 niðrbiúgt er nef,
Text *nefndiz Þír.
Text1
Text2 Miðra fletia

nefnask 意味 名乗る 場所 RT A
主語 einhverr af ásom (ヘイムダッル)
補語 Rígr (ヘイムダッル)
目的語 x (x)
Text-2 Svá segia menn í fornum sögum at einhverr af ásum,
Text-1 sá er Heimdallr hét, fór ferðar sinnar ok fram með
Text sióvarströndu nökkurri, kom at einum húsabœ ok *nefndiz
Text1 Rígr. Eptir þeiri sögu er kvæði þetta:
Text2

ráðask 意味 行く 場所 RT 4.12
主語 hann (ヘイムダッル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 krása beztr;
Text-1 reis hann upp þaðan,
Text *réðz at sofna.
Text1
Text2 Rígr kunni þeim

rjúfask	意味	倒れる	場所	GRM	4.6
主語	regin	(	神々	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	

Text-2 en í Þrúðheimi
Text-1 skal Þórr vera,
Text unz um *riúfaz regin.
Text1
Text2 Ýdalir heita,

rjúfask	意味	滅びる	場所	LS	41.3
主語	regin	(	アース神たち	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	

Text-2 Úlf sé ek liggia
Text-1 árósi fyrir,
Text unz *riúfaz regin;
Text1 því mundu næst,
Text2 nema þú nú þegir,

rjúfask	意味	滅びる	場所	VM	52.6
主語	regin	(	神々	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	

Text-2 hvat verðr Óðni
Text-1 at aldrlagi,
Text þá er *riúfaz regin?
Text1
Text2 Vafþrúðnir kvað:

sökkvask		意味	沈む	場所	VSP	66.8
主語	hón	(	巫女	)		
補語	x	(	x	)		
目的語	x	(	x	)		

Text-2 -- flýgr völl yfir --
Text-1 Níðhöggr nái --
Text nú mun hón *sökkvaz.
Text1
Text2

sýnask	意味	思われる	場所	VSP	32.2
主語	er	(	やどり木	)	
補語	mær	(	細い	)	
目的語	x	(	x	)	

Text-2
Text-1 Varð af þeim meiði
Text er mær *sýndiz,
Text1 harmflaug hættlig,
Text2 Höðr nam skióta.

seilask 意味 手を伸ばす 場所 HRBL 27.3
主語 ek (ソール)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Hárbarðr inn ragi!
Text-1 ek mynda þik í hel drepa,
Text ef ek mætta *seilaz um sund.
Text1
Text2 Hárbarðr kvað:

seilask 意味 手を伸ばす 場所 HRBL 28.1
主語 þú (ソール)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2
Text-1 Hárbarðr kvað:
Text Hvat skyldir þú um sund *seilaz.
Text1 er sakir ro allz öngar?
Text2 Hvat vanntu þá, Þórr?

setjask 意味 座る 場所 RT 11.2
主語 hón (シール)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2
Text-1 Miðra fletia
Text meirr *settiz hón;
Text1 sat hiá henni
Text2 sonr hús<s>;

setjask 意味 座る 場所 RT 3.3
主語 hann (ヘイムダッル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Rígr kunni þeim
Text-1 ráð at segia;
Text meirr *settiz hann
Text1 miðra fletia,
Text2 en á hlið hvára

setjask 意味 座る 場所 RT 30.3
主語 hann (ヘイムダッル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Rígr kunni þeim
Text-1 ráð at segia;
Text meirr *settiz hann
Text1 miðra fletia,
Text2 en á hlið hvára

skjótask 意味 落ちる 場所 GRT 23.6
主語 lúðr (石臼の台)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 í iötunmóði;
Text-1 skulfu skaptré,
Text *skautz lúðr ofan,
Text1 hraut hinn höfgi
Text2 hallr sundr í tvau.

skjótask 意味 潜り込む 場所 HDL 47.3
主語 fleiri (多くの人)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Rant at Óði
Text-1 ey þreyiandi,
Text *skutuz þ=é=r fleiri
Text1 und fyrirskyrtu;
Text2 hleypr þú, eðlvina,

skoðask 意味 見渡す 場所 HAV 1.3
主語 x (人)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Gáttir allar
Text-1 áðr gangi fram,
Text um *skoðaz skyli,
Text1 um skygnaz skyli;
Text2 þvíat óvíst er at vita,

skygnask 意味 見渡す 場所 HAV 1.4
主語 x (人)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 áðr gangi fram,
Text-1 um skoðaz skyli,
Text um *skygnaz skyli;
Text1 þvíat óvíst er at vita,
Text2 hvar óvinir

snúask 意味 帰る 場所 ALV 1.3
主語 brúðr (花嫁)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 (Bekki breiða,
Text-1 nú skal brúðr með mér
Text heim í sinni *snúaz!
Text1 Hratat um mægi
Text2 mun hveirom þikkia;

snúask 意味 もだえる 場所 VSP 50.3
主語 iörmungandr (ミズガルズ蛇)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Hrymr ekr austan,
Text-1 hefiz lind fyrir;
Text *snýz iörmungandr
Text1 í iötunmóði;
Text2 ormr knýr unnir,

steypask 意味 倒れる 場所 GRM B
主語 Konungr (ゲイルロズ)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 kominn, stóð hann upp ok vildi taka Óðin frá eldinom.
Text-1 Sverðit slapp ór hendi hánom, visso hiöltin niðr. Konungr
Text drap fœti ok *steyptiz áfram, en sverðit stóð í gögnom hann,
Text1 ok fekk hann bana. Óðinn hvarf þá. En Agnarr var þar
Text2 konungr lengi síðan.

steypask 意味 落ちる 場所 VSP 45.10
主語 veröld (世界)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 skildir ro klofnir,
Text-1 vindöld, vargöld,
Text áðr veröld *steypiz;
Text1 mun engi maðr
Text2 öðrom þyrma.

vegask 意味 切りかかる 場所 SKM 8.5
主語 er (刀)
補語 x (x)
目的語 iötna ætt (巨人族)
Text-2 vísan vafrloga,
Text-1 ok þat sverð
Text er siálft *vegiz
Text1 við iötna ætt.
Text2

vegask 意味 切りかかる 場所 SKM 9.5
主語 er (刀)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 vísan vafrloga,
Text-1 ok þat sverð
Text er siálft mun *vegaz,
Text1 ef sá er horskr er hefir.
Text2

vinnask 意味 十分である 場所 HAV 60.5
主語 er (木)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 þess kann maðr miöt,
Text-1 ok þess viðar
Text er *vinnaz megi
Text1 mál ok missere.
Text2

相互24例
berjask 意味 戦う 場所 VSP 45.1
主語 Brœðr (兄弟たち)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 röm sigt=í=va.
Text-1
Text Brœðr muno *beriaz
Text1 ok at bönom verða<z>,
Text2 muno systrungar

blandask 意味 混ざる 場所 ALV 17.5
主語 er (雲)
補語 x (x)
目的語 skúrom (雨)
Text-2 vöromk, dvergr, at vitir --,
Text-1 hvé þau ský heita
Text er skúrom *blandaz,
Text1 heimi hveriom í.)
Text2

finnask 意味 会う 場所 HRBL 59.4
主語 vit (ソール, オージン)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 allz þú mér skœtingo einni svarar;
Text-1 launa mun ek þér farsynion,
Text ef vit *finnomk í sinn annat!
Text1
Text2 {Hárbarðr kvað:}>

finnask 意味 会う 場所 SKM 24.5
主語 it Gymir (ギュミル, スキールニル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 at mannzkis munom;
Text-1 þó ek hins get,
Text ef it Gymir *finniz,
Text1 vígs ótrauðir,
Text2 at ykr vega tíði.

finnask 意味 戦う 場所 VM 17.5
主語 Surtr, in sváso goð (スルト，やさしい神)
補語 x (x)
目的語 vígi (戦い)
Text-2 þíns um freista frama,
Text-1 hvé sá völlr heitir
Text er *finnaz vígi at
Text1 Surtr ok in sváso goð.
Text2

finnask 意味 戦う 場所 VM 18.2
主語 Surtr, in sváso goð (スルト，やさしい神)
補語 x (x)
目的語 vígi (戦い)
Text-2 Óðinn {kvað:}>
Text-1 Vígríðr heitir völlr,
Text er *finnaz vígi at
Text1 Surtr ok in sváso goð;
Text2 hundrað rasta

finnask 意味 会う 場所 VSP 60.1
主語 æsir (アース神たち)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 fiska veiðir.
Text-1
Text *Finnaz æsir
Text1 á Iðavelli
Text2 ok um moldþinur

gætask 意味 相談する 場所 VSP 23.4
主語 ginnheilog goð (聖なる神々（アース神）)
補語 x (x)
目的語 þat (以下の節)
Text-2 á rökstóla,
Text-1 ginnheilog goð,
Text ok um þat *gættuz,
Text1 hvárt skyldo æsir
Text2 afráð gialda

gætask 意味 相談する 場所 VSP 25.4
主語 ginnheilog goð (聖なる神々（アース神）)
補語 x (x)
目的語 þat (以下の節)
Text-2 á rökstóla,
Text-1 ginnheilog goð,
Text ok um þat *gættuz,
Text1 hverir hefði lopt alt
Text2 lævi blandit

gætask 意味 相談する 場所 VSP 6.4
主語 ginnheilog goð (聖なる神々（アース神）)
補語 x (x)
目的語 þat (以下の節)
Text-2 á rökstóla,
Text-1 ginnheilog goð,
Text ok um þat *gættuz:
Text1 nótt ok niðiom
Text2 nöfn um gáfo,

gleðjask 意味 お互いに喜ぶ 場所 HAV 41.2
主語 vinir (友だち)
補語 x (x)
目的語 Vápnom ok váðom (武器と服)
Text-2
Text-1 Vápnom ok váðom
Text skolo vinir *gleðiaz,
Text1 þat er á siálfum sýnst;
Text2 viðrgefendr ok endrgefendr

höggvask 意味 戦う 場所 VM 40.3
主語 hvar ýtar (誰)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Segðu þat et ellipta,
Text-1 hvar ýtar túnom í
Text *höggvaz hverian dag.
Text1
Text2 {Vafþrúðnir kvað:}>

höggvask 意味 戦う 場所 VM 41.3
主語 <Allir> <einheriar> (エインヘリャル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 <Allir> <einheriar>
Text-1 <Óðins> <túnum> <í>
Text *<höggvaz> <hverian> <dag>;
Text1 val þeir kiósa
Text2 ok ríða vígi frá,

hittask 意味 会う 場所 VSP 7.1
主語 æsir (アース神たち)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 árom at telia.
Text-1
Text *Hittoz æsir
Text1 á Iðavelli,
Text2 þeir er hörg ok hof

mælask 意味 語り合う 場所 VM 19.3
主語 x (オージン，ヴァフスルーズニル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Fróðr ertu nú, gestr,
Text-1 far þú á bekk iötuns,
Text ok *mælomk í sessi saman,
Text1 höfði veðia
Text2 vit skolom höllo í,

rekask 意味 罵り合う 場所 HAV 32.3
主語 Gumnar margir (多くの人)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Gumnar margir
Text-1 erosk gagnhollir,
Text en at virði *<v>rekaz;
Text1 aldar róg
Text2 þat mun æ vera,

sakask 意味 言い争う 場所 LS 19.3
主語 it tveir æsir (ロキ，ブラギ)
補語 x (x)
目的語 sáryrðom (罵りの言葉)
Text-2 Hví it æsir tveir
Text-1 skoloð inni hér
Text sáryrðom *sakaz?
Text1 Lopzki þat veit,
Text2 at hann leikinn er

sakask 意味 言い争う 場所 LS 5.3
主語 vit einir (ロキ，エルディル)
補語 x (x)
目的語 sáryrðom (相手を傷つける言葉)
Text-2 Veiztu þat, Eldir,
Text-1 ef vit einir skolom
Text sáryrðom *sakaz,
Text1 auðigr verða
Text2 mun ek í andsvörom,

sjásk 意味 見つめあう 場所 RT 27.4
主語 hión (ファジル，モージル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 gólf var strát;
Text-1 sátu hión,
Text *sáz í augu,
Text1 Faðir ok Móðir,
Text2 fingrum at leika.

trúask 意味 信じる 場所 SKM 5.6
主語 tveir (フレイ, スキールニル)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 þvíat ungir saman
Text-1 várom í árdaga;
Text vel mættim tveir *trúask.
Text1
Text2 Freyr {kvað}:

vegask 意味 争う 場所 LS 18.6
主語 it <v>reiðr (ブラギ, ロキ)
補語 x (x)
目的語 x (x)
Text-2 Braga ek kyrri
Text-1 biórreifan,
Text vilkat ek at it <v>reiðir *vegiz.
Text1
Text2 {Gefion} kvað:

verðask 意味 殺し合う 場所 VSP 45.2
主語 Brœðr (兄弟たち)
補語 x (x)
目的語 bönom (死)
Text-2
Text-1 Brœðr muno beriaz
Text ok at bönom *verða<z>,
Text1 muno systrungar
Text2 sifiom spilla;

verask 意味 ～である 場所 HAV 32.2
主語 Gumnar margir (多くの人)
補語 gagnhollir (信頼できる)
目的語 x (x)
Text-2
Text-1 Gumnar margir
Text *erosk gagnhollir,
Text1 en at virði <v>rekaz;
Text2 aldar róg

verask 意味 ～である 場所 HAV 41.5
主語 viðrgefendr ok endrgefendr (贈り物を返すものと贈り物を送るもの)
補語 vinir (友)
目的語 x (x)
Text-2 þat er á siálfum sýnst;
Text-1 viðrgefendr ok endrgefendr
Text *eros=k= lengst vinir,
Text1 ef þat bíðr at verða vel.
Text2

能動 5 例

þróask	意味	大きくなる	場所	HAV	79.4
主語	metnaðr	(	自尊心	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	hánom	(	愚か者	)	
Text-2	ef eignaz getr				
Text-1	fé eða flióðs munoð,				
Text	metnaðr hánom *þróaz,				
Text1	en manvit aldregi;				
Text2	fram gengr hann driúgt í dul.				

frævask	意味	豊かになる	場所	HAV	141.1
主語	ek	(	オージン	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	
Text-2	ausinn Óðreri.				
Text-1					
Text	Þá nam ek *frævaz				
Text1	ok fróðr vera				
Text2	ok vaxa ok vel hafaz;				

gerask	意味	なる	場所	SKM	36.7
主語	x	(	x	)	
補語	þarfar	(	必要	)	
目的語	þess	(	それ	)	
Text-2	svá ek þat af ríst,				
Text-1	sem ek þat á reist,				
Text	ef *göraz þarfar þess.				
Text1					
Text2	{Gerðr kvað:}>				

kyndask	意味	燃える	場所	VSP	46.2
主語	miötuðr	(	運命	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	
Text-2					
Text-1	Leika Míms synir,				
Text	en miötuðr *kyndiz				
Text1	at en<o> galla				
Text2	Giallarhorni;				

vanask	意味	絶える	場所	GRM	25.6
主語	sú veig	(	ヘイズルーンの蜜酒	)	
補語	x	(	x	)	
目的語	x	(	x	)	
Text-2	skapker fylla				
Text-1	hón skal ins skíra miaðar,				
Text	knáat sú veig *vanaz.				
Text1					
Text2	Eikþyrnir heitir hiörtr,				

Hvordan bruges '*sk*-verber' i oldnordisk?
– med eksempler fra gudedigtene i Eddaen –

Yusuke Horii

Resumé

Nogle oldnordiske verber har specielle former med hensyn til *sk*-endelse. Ved at læse fem grammatikker, der handler om oldnordisk, har jeg i denne artikel vist, hvordan disse former blev dannet, og hvordan de bruges. I de fire grammatikker står der på forskellige måder, at *sk*-formerne blev dannet ved at føje det refleksive pronomen 'sik' til en aktiv form af verbet. Der står også, at *mk*-endelsen kommer fra det personlige pronomen 'mik' (første person, ental). Om sprogbrug, dvs. hvordan *sk*-verber bruges, forklares på forskellig vis, at dette *sk*-verbum stort set har følgende fire funktioner: 1. refleksiv, 2. reciprok, 3. aktiv, 4. passiv. Den refleksive funktion er den oprindelige funktion for *sk*-verbumet i forhold til dets dannelse. Den reciprokke funktion kan bruges med subjektet i flertal. Den aktive funktion viser nogle inkoative handlinger, eller at subjektet går over i en ny tilstand. Den sidste funktion, passiv, bruges mest i lærd stil, og kun få *sk*-verber viser denne funktion. Derefter har jeg analyseret *sk*-verberne i gudedigtene i Eddaen og inddelt dem i grupper efter de 4 funktioner. Ud af 4133 verber er der 105 *sk*-verber i gudedigtene i Eddaen (refleksive 69, reciprokke 24, passive 7, aktive 5). Både på den traditionelle måde og på den moderne, dvs. ved at læse de grammatikker og sammenfatte dem og ved at analysere eksempler fra databasen som korpuslingvistik, har jeg undersøgt *sk*-verberne i oldnordisk. Begge dele fungerer godt nok, og den store mulighed for at kombinere traditionel læsning og moderne databaseanalyse kan godt udnyttes.